

可溶性インターロイキン2 レセプターと悪性リンパ腫の関連について

～診断・治療奏功・予後判定の有用性～

◎久保 沙織¹⁾、黒川 龍美¹⁾、川井 優¹⁾
公立甲賀病院 臨床検査課¹⁾

【はじめに】血中可溶性インターロイキン2 レセプター (sIL-2R)は、リンパ球活性化の指標であり、造血器悪性腫瘍の他、感染症や膠原病などで上昇することが知られている。今回、2016年7月より院内測定導入を機に、悪性リンパ腫に対し検討した結果、若干の知見を得たので報告する。

【対象】2016年7月から2017年7月までに提出された検体843件。測定機器はSTACIA、試薬はCLEIA IL-2R。

【内容】悪性リンパ腫陽性群27名(陽性群)、陰性群190名について初回sIL-2R値の比較検討。両群で初回値カットオフ値(COV)以上となった症例について初回値と次回値の比較検討。悪性リンパ腫治療中症例34例で、①予後は良好か不良か、②検討期間中の寛解の有無、のグループ各各において症例ごとに、治療期間中に示した最高値、治療開始日、寛解判定日の3点での測定値についての検討をそれぞれ行った。

【結果および考察】陽性群と陰性群の初回値については陽性群が優位に高値を示した($p<0.05$)。初回値・次回値の比較では、両群において初回値の差は認めなかったが、陰性群

の次回値が陽性群に比べ優位に低下した($p<0.05$)。COVは Δ (次回値-初回値)では99U/mL以上の減少(感度87.5%、特異度84.2%、AUC0.868)、(初回値/次回値)比では11.9%以上の減少(感度87.5%、特異度84.2%、AUC0.928)となった。よって初回値から次回値のsIL-2R値減少をみることは悪性リンパ腫と非悪性リンパ腫の鑑別に有用であると考えられる。①、②グループによる検討では、①の予後不良群、②の非寛解群で最高値が優位に高値を示し($p<0.05$)、治療経過でsIL-2R値の減少が大きいほど寛解が得やすく予後は良好であった。一方で、治療開始時点でのsIL-2R値は①、②両群ともにそれぞれの関連は明らかではなかった。

【まとめ】sIL-2R値は悪性リンパ腫の病勢を反映し、悪性リンパ腫の診断や治療奏功、予後判定の補助的役割等、臨床的有用性があると考えられた。悪性リンパ腫のタイプ別についての検討や、他の検査項目との関係等については今後の検討課題としたい。

連絡先 0748-65-1167(直通)